



三角山

令和8年(2026年)3月25日

令和7年度最終号

NO. 963

札幌市立三角山小学校

<https://www.sankakuyama-e.sapporo-c.ed.jp/>

共に歩み、共に育んだ一年に感謝を込めて

校長 紺野 高裕

雪解けの水音が街に響き、ようやく札幌の春がすぐそこまで来ていることを感じる季節となりました。校庭の雪山も少しずつ小さくなり、子どもたちの表情には、一つ上の学年へと進む期待と希望が溢れています。

3月23日には、48名の6年生が、保護者、御来賓の皆様、在校生、教職員の温かい拍手に送られ、立派に巣立っていきました。卒業生一人一人の表情には、小学校生活を全力で過ごしてきた自信と新たな旅立ちへの期待がにじみ出ていました。この気持ちを忘れず、中学校でもさらに飛躍していくことを心から願っております。

この一年を振り返りますと、まさに「自然との対峙」と「絆の再確認」の連続であったと感じております。まず、記録的な「猛暑」に見舞われた夏。北海道では考えられないような厳しい暑さの日もあり、子どもたちの健康管理には細心の注意を払いました。エアコンの稼働や活動内容の変更など、学校としての対応に、保護者の皆様からは温かいご理解とご協力をいただきました。水筒や体温を冷やす保冷材の準備など、ご家庭でのサポートがあったからこそ、子どもたちは誰一人欠けることなく、あの熱い夏を乗り越えることができました。

また、秋には「ヒグマの出没」という、都市部でありながら自然と隣り合わせにある札幌特有の緊張感にも包まれました。付き添い登校や見守り体制の強化など、一朝一夕にはできない対応が求められましたが、ここで大きな力となったのが地域の皆様のネットワークでした。そして冬、一晩で景色を変える「大雪」への対応。臨時休校への対応はもとより、その後の通学路の確保のために、早朝から除雪や登下校の安全確保に汗を流してくださった地域の方々への姿は、子どもたちの目にも「支えられている自分たち」という感謝の心として深く刻まれたはずで

こうした困難な状況下にあっても、子どもたちはたくましく、そしてしなやかに成長を遂げました。行事のたびに知恵を出し合い、お互いを思いやる姿。学習に真剣に向き合い、昨日までできなかったことができるようになった瞬間の輝く瞳。本校の子どもたちは、自然の猛威を嘆くのではなく、その中でどう過ごすべきかを自ら考え、一歩ずつ前へ進んできました。この一年で培われた不屈の精神や折れない心は、将来彼らが予測不可能な社会を生きていく上での大きな財産となるに違いありません。

この一年、本校の教育活動を支えてくださった全ての皆様に、改めて心より感謝申し上げます。

PTA活動やボランティア活動に携わっていただいた皆様。三角山フェスティバルの運営をはじめ、花壇整備等の子どもたちの教育環境を整えるための献身的なご尽力、季節ごとの掲示板の張替え、読み聞かせや図書整理など、学校の活力を維持する大きな原動力となりました。皆様の「子どもたちのために」という純粋な思いが、学校をより温かい場所に変えてくれました。

そして、日頃から通学路で交通安全指導や見守り活動を続けてくださっている地域や保護者ボランティアの皆様。黄色い旗を手に、笑顔で声をかけてくださるその存在が、どれほど子どもたちの安心感につながっているか計り知れません。札幌の厳しい自然の中でも、皆様の見守りという「人の温もり」が、子どもたちの通学路を常に明るく照らしていただきました。

教育は学校だけで完結するものではありません。家庭、地域、そして学校が、手を取り合って同じ方向を向くことで、子どもたちは健やかに育ちます。この一年、本校が大きな事故なく、充実した教育活動を継続できたのは、保護者や地域の方々という最強の伴走者がいてくださったおかげであり、改めて厚くお礼申し上げます。

さあ、間もなく令和7年度が幕を閉じ、新しい扉が開かれます。子どもたちが、この一年で蓄えた力をバネに、春の光の中へ力強く踏み出していくことを確信しております。一年間、本当にありがとうございました。